

- 柄谷行人を中心とした批評史のみが正統なのか？ 浅田彰に抗う
- 吉本隆明の主要著作の文庫化（1980年代初頭）
『共同幻想論』（解説は中上健次）→『遠野物語』（前半）と『古事記』（後半）
『言語にとって美とは何か』（初版解説は柄谷行人）→折口信夫の文学発生論
- 澁澤龍彦の諸著作の文庫化（1980年代初頭）
「知」のエッセイ＝クリティック、「幻想文学」への展望（夢野久作、埴谷雄高、安部公房）
角川文庫、河出文庫、中公文庫→読書のアナーキー（民俗学復権、澁澤系列の芸術批評）
- サンリオSF文庫→サイエンスにしてスペキュレイティヴなフィクション
ディレイニー（過剰なメタフィクション）とデイク（メタフィクションの崩壊）
- 蓮實重彦の映画批評→上映の場の組織、ミニ・シアターその他
- 大学という場→世界文学の学習（「もの」と外国語）
フランス象徴主義からシュルレアリスムへ、「詩と批評」との関係、翻訳者としての批評家
ボードレール、ランボー、マラルメ→小林秀雄、吉本隆明、柄谷行人
ブルトン、バタイユ、アルトー→マルクスとランボーの結合→現代思想としての「反復」
- アカデミズムを選択せず、表現者も選択しないこと
→「もの」の学を選択、「大学院」の拒否、「文芸」の拒否、ニューアカデミズムの受容
- 出版の現場で
中沢新一の南方熊楠、ジル・ドゥルーズの諸著作、マルグリット・デュラスの諸著作
「表象文化」への疑義→エッセイ集としての思想書 vs 博士論文としての思想書
詩人＝批評家など存在しない
- 批評の現場で
新人賞について、先行する批評家（加藤典洋と川村湊）について、「文芸誌」について
「批評」は自立しうるのか？ 研究と表現は両立しうるのか？
- 「現代日本の批評」のオルタナティヴへ→「読むこと」「書くこと」「創ること」の連関
ジャンルの無化とジャンルの横断、近代以前と近代以降